

九所明神神社と灯籠

仁和寺境内の北東端に位置する九所明神は、仏教寺院の中にある神社で、日本の歴史の中でこれらの宗教の伝統がいかに密接に結びついていたかを知ることができます。神道と仏教の融合は、1868年に政府の命令により分離されるまで、1,000年以上も続きました。しかし、この分離は絶対的なものではなく、九所明神と仁和寺の場合のように、未だに神社が仏教寺院の守護神としての役割を果たしていることも多くあります。

本殿に1柱、隣接する2つのお堂（左右殿）に4柱ずつと、九所明神の3つの建物に9柱の神道の神々が祀られています。これらの神々はいずれも京都各地の主要な神社でも祀られており、仁和寺と特別な縁のある朝廷の安全と繁栄を祈願するために九所明神に集ったとされています。仁和寺は、宇多天皇（867-931年）が退位後に初代住職となり創建した寺で、1867年までは、住職が皇族の皇子であることを示す門跡寺院という特別な地位を有していました。九所明神の本堂には、伝説上の第15代天皇である応神天皇の神霊であり、皇室と武士の守護神とされる八幡が祀られています。

鳥居の前には3つの石灯籠が立っています。これらは、現在の社殿が完成した1644年まで遡ります。これらの石灯籠は、茶人であり灯籠師でもあった古田織部（1544-1615年）の名を冠した織部流のもので、台座上部の丸みを帯びた形と先端にあるこぶのような宝珠が特徴的です。